戦争捕虜問題の比較文化的考察（上）

――「食」の問題を中心に――

中尾知代

序

ロンドン大学SOASにおいて、去る一九九八年一〇月三〇日から三一日にかけて留学生国際基礎養成コースの主催により「よりグローバルな異文化交錯への理解を目指して」と題してセミナーが開かれた。エドワード・サイードが提起した「オリエンタリズム」の概念をフレイムワークに現代の異文化交錯の問題が論じられたが、その個別トピックのセッションとして日英捕虜問題が取り上げられた。[1]『戦場にかける橋』を叩き台に、「事実」と「フィクション」の関連を巡り、ポール・エルストン（BBCドキュメンタリー番組『戦場にかける橋の実話』制作ディレクター）、チャールズ・ピオール（ビルマスター協会（英国ビルマ戦線在郷軍人会）渉外書記官・元泰緬鉄道捕虜）、及び筆者を交えて発表と討論が行われ、各々『戦場にかける橋』の実在モデルについて、泰緬鉄道の経験について、映画中の帝国主義と植民地の表象について発表。出席していた英国市民抑留者も加わり八〇余名の聴衆の間で、原爆使用の是非、異文化と戦争、賠償と謝罪についての意見が活発に交わされた。

その中で、捕虜時代にトウージイ大佐（映画のニコルソン大佐のモデル）・斎藤曹長（同・サイトウ大佐のモデルとされる）の収容所で働き、殴打が原因で現在も難聴のピオールが次の点を強調した。「米食について一言述べたい。西洋食で育った自分たちが、ある日突然、全く違う東洋の食事に変わったことがどんなに大変だったか想像して貰えるだろうか。しかもその米は現在皆が食べるようなものではなく、蛆虫が涌き、あの労働に全く見合わない量だった。米食でのヴィタミンB不足は……」彼は少し言い淀んだ。「男性性器（精嚢）に損傷を与える。私は捕虜時代の栄養障害故に長らく子供が出来ず、妻にも苦労をかけたのです」。

捕虜虐待問題と食事の関連は、エルストンの番組にも現れた。元日本軍側の証言者が「捕虜は我々と同じものを食べていたのに、なぜばたばたと倒れたのか…」と首を傾げる様子と英人元捕虜が「日本兵は我々より良いものを食べていた」との証言が並置され、食事情への問題提起となっている。捕虜問題と食の関わりは複雑であり、不明な点が多い。栄養素の不足や消化困難と後遺症の関連や、さらに栄養吸収率の差異の可能性については、医学と栄養学・農学の専門的研究が不可欠だ。日本兵と捕虜間の、糧食の質量差に関する収容所別の実態や、日本軍側の当時の食糧供給能力への考察も必要である。食の問題は、数多くの捕虜を苦しめ、熱帯病悪化の原因になったにも関わらず、十分な調査はされぬまま、英国では日本軍の捕虜虐待の象徴とされ、片や日本では虐待を文化摩擦の一環に帰結させる役割を半世紀の間担ってきた。

海外生活で食の差異に対応する人も増えた現在、捕虜の話に共感する部分はある。一方で、日本で語られる戦争の話は兵隊であれ疎開であれ飢えに満ちており、「米しかない」との慨嘆に実感が湧かない。ここでは、筆者の二年に渡る英国での捕虜の聴き取り調査において「食」の問題がどのように立ち現れたかを報告したい。この拙い報告が、今後捕虜問題をめぐる異文化衝突や食料問題を整理する一助となり、専門家諸氏が取り組みなおす契機の一つになれば幸いである。

一、調査の方法

筆者は、一九九四年より二年の準備を経た後、一九九六年から九八年にかけて英国に留学し、日本軍の管轄下にいた元捕虜・ビルマ軍人・抑留者とそれぞれの家族を対象にオーラルヒストリー（聴き取り）を手法の中心に据え調査を進めてきた。聴き取り対象の中心は元捕虜と家族であり、ビルマ軍人と抑留者は現在のところは比較対象としての位置を占める。恵子・ホームズ[2]による捕虜の日本訪問旅行、BCFG及び日本ビルマ戦友会の日英合同のビルマ慰霊旅行、捕虜や軍人・抑留者の年次集会や会合、及び彼等を招待する各種催しに参加した。短時間ないし短期間のインタビューを予備調査として行う一方で、通常は捕虜の家庭を訪問し、二―四時間にわたり面談、（一人あたり数回に渡る場合もある）その様子を録音・録画し、書き起こしまとめる作業を行った。調査範囲はウエールズ及びイーストアングリア（英国中南部）、ケント、ヨークである。調査人数は、会った元捕虜と家族約二〇〇名、ビルマ軍人一五〇余名、市民抑留者四五名。うち本編では、詳細な面談を行った者から一〇名を取り上げる。スコットランドは主としてサザランドアンドアーガイルの連隊博物館の調査と、間接的な面談に止まった。捕虜の残した日記、回想録・裁判記録に加え、日本側に残された資料との対照を行っている。一九九八年五月の天皇訪英前後には、捕虜や抑留者の気持ちの高低があり、従来日本人に語ることを拒絶した捕虜が必死で語ろうとする場合や、PTSD（心的外傷後ストレス障害）の一種である悪夢やフラッシュバックが再発し経験を語れなくなる場合に分かれた。面談記録の詳細な分析は緒についたばかりである。

二、問題の所在

まず「食」に関わる問題がどのように捕虜問題に関与しているかを整理したい。

英国において捕虜の衣食住の問題は殴打・拷問・強制労働と並び、日本側の「虐待」の象徴である。戦争記念日や天皇訪英の際にも、ジャップハッピーと称された、ふんどしのような簡便下着をまとい骨と皮に痩せ衰えた捕虜の姿がメデイアに繰り返し登場する。収容所解放後に撮影された、肋骨の浮き出た若い兵隊や、懲罰房から出された直後の、これ以上痩せるのは不可能なほどの状態の捕虜の写真は、ロンドン中央の帝国戦争博物館に虐待の過酷さを示すものとして、ナチスのベルゲン・ベルゼン収容所の展示の隣室に掲げられている。骸骨のようなユダヤ人の遺骸と並ぶ捕虜の様相は、maltreatment（虐待）の問題の中でmalnutrition（栄養不良）が強く意識されていることを示している。展示では、米の飯を盛った椀を手に弱よわしく微笑む民間人抑留者の少女の写真が飾られ、「これは五人分の食料」という説明が付いている。他の個所のキャプションにも、捕虜は米しか与えられず過酷な労働をしいられたという説明がある。

このキャプションを読解するには英国側の食習慣における、米という食材の位置付けに対する理解が必要である。第二次世界大戦前の英国においてライスプディングを除き米食の習慣が皆無に近く、日本人がトウモロコシを野菜と認識するように、米も野菜の扱いであり意識的にも階層の低い食物であった。「米しか与えない」というのは、量の多寡を別にしても、イコール「まともな食事は与えない」という表現なのである。さらに注意すべきは、この捕虜の栄養不全状態が、日本側の食糧難というコンテクスト

とは関係なく、ワザと食料を与えなかった〝意図的な残虐行為〟として理解されている点である。捕虜虐待問題において日本軍側の食糧政策の失敗が果たして斟酌可能かは別に検討を要するが、日本軍側や日本国内の「飢え」の実態に関する知識が英国においては非常に少ないことは確かである。特に、この問題が再度浮上した一九八〇年代後半から村山首相の「お詫び・謝罪」を巡り大きく世論が揺れた一九九五年度のVJデイ（Victory over Japan Day：対日戦勝記念日）にかけては、日本側の企業の進出や土地の購入、日本人買い物客の多さなどと結びつき、金持ちの日本が、当然可能であった筈の捕虜への世話を怠たったという印象を強化した面がある。[3]階級格差と階級闘争が恒常的に意識される英国では、成り上がりの中産階級国家である日本が捕虜を下層階級として差別したとの感覚も観察される。食事の質量に加え、収容所家屋の設備の悪さ、衣料の少なさ、医療の貧困さ・赤十字救恤品の不支給等は、暴行や拷問と同様に「残酷な日本人」というイメージを作りつづけている。

一方、日本において「食」問題は、戦争の虐待問題を全て異文化間摩擦と誤解の問題に還元して考えさせる役割を担った。例えば、『朝日新聞』の「地球食材の旅」では「救いの食物木の根と誤解も」というタイトルで、長野県下伊那郡天竜村の満島俘虜収容所で、監視員が努力して与えた牛蒡が、BC級裁判において、木の根を食べさせたと語られた例を調べ、食材への意識の差異を考察している。[4]しかし同時に捕虜虐待の事象の全てが、異文化間の齟齬に基づく悲しい誤解であったかのような印象をもたらしている。「牛蒡・木の根」事件は捕虜問題の全容や日本軍の食料政策の問題、殴打、強制労働、苛め、惨殺、過酷な処罰などの事象と歴史的責任を「受け入れられなかった個人の善意の物語」に置き換える言説として成立し人口に膾炙している。筆者も、日本で捕虜問題を問うた際に「でも牛蒡を与えると木の根と誤解されたりしたんでしょう」という反応に時おり出会う。この拘りは、日本側が西洋との交渉の中で常に感じてきた、西洋の価値観と解釈を強要される悔しさの感覚を反映した故かもしれない。

そもそも食材と文化習慣の差異に捕虜の苦難の一因を求める姿勢は戦争直後から存在した。敗戦後、陸軍大臣下村定は「俘虜取扱関係連合軍側質問に対する応答要領などに関する件通達」の第二要領の二において、国内の食料事情と共に文化的相違に注意を促し「国内における労務、食料、衣料等の事情及び……彼が言語、風習、嗜好（特に食事）の差異等に関連し俘虜管理当事者の苦心……に至りてはその事実を十分に公明に」するよう奨励している。[5]小菅信子が既に指摘しているように西洋側にも同様の解釈は存在した。[6]赤十字国際委員会顧問であったジオルデは一九四七年の活動報告で、日本の過酷な扱いをある程度日本と西洋の文化の差異に帰し、「日本兵の習慣は白人にとっては飢えと病の制度」であるという見解を出した。[7]戦前から日本に滞在し、戦時中に日本の収容所を慰問したマレラ司教も、極東国際軍事裁判において日本の生活水準が戦時中は特に低かったことを指摘し「暴行、虐殺は兎に角として、住居、被服に関する俘虜の状態は全く一般国民のそれと同じであった」が、日本人にとっては影響のない水準が「連合軍の人々には耐え難く残酷なものとなった」としている。[8]

とはいえ、田中利幸[9]や小菅が指摘するように捕虜虐待を日本の特殊性に帰すのは危険であるし、「三割にも上る俘虜死亡率を単に文化摩擦の悲劇的結果と論じるだけでは不充分」[10]ではある。ならば、この文化摩擦は、いかなる比重をもって論じられるべきなのか。この比重を明確にすれば、虐待問題の本質もかえって明確になりうるのではないか。以下、聴き取りや日記調査の中で現れた異文化問題を中心に、この問題を検討してみたい。ただし、今回の論中では触れないが、もっと直裁な、〝捕虜虐待〟としか形容できない行為が、聴き取りの中で数々現れたことは断っておきたい。

三、「食」の後遺症と現在の捕虜問題との関わり

レオ・ローリングズはその著『クワイ河捕虜収容所』の中で粥食を続ける捕虜の姿勢が悪くなり脚気になりやすくなったことを記している[11]。食事・飢えの苦難はどの捕虜の経験談でも言及されるし、帝国戦争博物館の文書課に収蔵されている捕虜の日記や回顧談にも度々現れる。収容中の飢餓状態及び栄養不良がもたらす体調の変化、胃腸の障害などの訴えが多い。病気の時に粥や米を食べると余計に下痢が酷くなったと述べる例も二件あった。また、アウミ収容所内の窃盗事件を細かく裁いたアボット少尉の記録[12]や、大江山収容所のハミルトン少尉の記録ほか幾多の資料が示すように、これら食糧の不足は俘虜間の食物の盗みあいを招き人間関係の悪化に関連があった[13]。

次に戦後の後遺症の問題がある。捕虜や捕虜の家族が、捕虜時代の食生活の具体的後遺症として認識している症状は心身症的なものと身体的なものに分かれる。聴き取りの中で現れた例としては、現在も決して米が食べられない、食事を一切残せない、あるいは食事の時間が僅かでも遅れるとヒステリックになる(食事が無いかもという強迫観念にとらわれる)等、米という食材を除けば、戦時中に飢えを経験した日本人と共通する現象が見られた。後者のほうは、捕虜時代の栄養不足による胃腸の損傷による食物摂取の困難(果物の皮等の刺激物は一切不可)、胃弱・栄養障害故の虚弱体質、長時間労働が不可能になるなどの他に、ヴィタミン不足が原因とされる末梢神経損傷による視力喪失・弱視・皮膚表層部分の麻痺の訴えなどがあった。香港シャンシュイポー(深水埗)収容所から名古屋に移送されたスタンレイ・モーム氏は香港の収容所に入ってまもなく全身の神経が痺れ、皮膚表面の感覚と視力をほぼ完全に失った。医師が緑の草を煮て飲ませるという実験の被験者に彼を選んだ為に症状の悪化が止まったと彼は述べている。

栄養素と症例の関連への考察は後に譲るとして、ここでは特に不妊の例を報告しておく。最初にあげたチャールズ・ピオールは、医師から子供が出来ない理由は捕虜時代の圧倒的なヴィタミンB不足が原因と診断された。彼は戦後八年を経てようやく子供に恵まれたことを、ヴィタミン剤投与治療の効果と考えている。一方、子供が出来なかった例もある。デイヴィッド・ウイルソン(極東捕虜連合の全国書記及びエセックス支部代表。品川収容所)の場合も同様の診断を受けたが、結局子供が出来ず、二人の養子を取った。戦争直後にデイヴィッドと出会って結婚したアイナ夫人は子供が出来なかった辛さを、半世紀分の気苦労と心配の皺が刻まれた表情で静かに語った。結婚記念写真の中で、捕虜時代の衰弱がまだ残るデイヴィッドの横で、ふくよかな健康そのものの姿で微笑む彼女の姿は、現在までの長い道のりの辛さを思わせた。

不妊や不能と捕虜の栄養障害との関連は証明しにくい。彼女も、不妊が夫の捕虜時代の経験が原因と完全に断じる訳ではない。が、捕虜時代の食糧難が原因かもしれないという疑い自体に夫婦は苦しめられた。夫の側は妻や家族への申し訳なさに加え男性としてのアイデンティティ面での葛藤がある。妻の方は、ウイルソン家の唯一の男児である夫に後継ぎをもうけられなかった負い目を、自分の責任ではないにしろ、夫の姉妹たちに感じ続けている。意図的ではなかったにせよ、結果として断種の憂き目にあったという思いは、夫のそれ以外の後遺症、すなわち、極度の人嫌いや突発的に怒りをぶつけるなどの症状と共に夫人を長く苦しめた。彼らの養子は二人とも事情を知っているが、孫には血縁でないことは伝えない決心をしている。

妻・未亡人は、戦後次から次へと病気にかかる夫の世話にあけくれた不満や、不妊・不能への衝撃と慨嘆、さらに元捕虜の精神的後遺症(悪夢・暴行)の負担など、捕虜虐待問題の間接的被害者として存在し、日本―日本人への憎悪を抱いているケースが多々ある。アイナや、後述するヒルダ・デイヴィース未亡人によると、不妊と捕虜の関連は、極東捕虜連合や元捕虜の妻・未亡人の組織で繰り返し語られてきたという。

食からはずれるが、デイヴィース未亡人は、監視兵たちが捕虜らの男性性器を殴ったことが戦後の不能の原因という説が捕虜の妻の間に存在すると述べている。妻たちの苦しみや、やり切れない思いは、具体的な出口を持たないままに、漠然と、しかし激しい日本への怒りや謝罪の要求につながっている。これはまた、捕虜にしばしば見られる離婚の背景のひとつである。

その苦悩は経済的な問題とも関連する。戦後の虚弱・胃腸障害と捕虜経験との関連は証明しにくい。さらに英国の軍人恩給制度が、弾丸ひとつの負傷や、手足を失ったなどの具体的損害を対象に計算されるため、元捕虜らの心身損傷のような見えにくい事例は軍人恩給や戦争未亡人年金の対象としては成立が困難である。ただでさえ虚弱な身ゆえに仕事上の成功が得にくかった上に、年金の受給もままならない。夫を五〇代で亡くしたヒルダ夫人は、福祉事務所に夫の病気治療にかかった費用の領収書を全て揃えて談判に出向いたが一切相手にされなかった。彼女は「日本政府は私の人生を返してくれ」と嘆く。階級制度の残る英国では、もとその捕虜がどの階級に属したか、また教育の機会にどこまで恵まれたかにより、生活の逼迫度は異なるが、現在の経済的圧迫感が日本政府への謝罪・賠償請求に結びつく問題となっている。

謝罪(賠償)要求については階級(クラス)が低い層の方の度合いが高いとは限らない。捕虜以前の生活との落差が激しく、また肉食に頼る度合いの高かった中産階級以上ほど実際の労働が害を与えたケースや、より自尊心に衝撃があった場合もあり、日本側の罪の認証を求める要請は階級を超えて広い。

外部からは見えにくい後遺症ゆえに、「忘れられた軍隊」「忘れられた被害者」として捕虜らのフラストレーションは高く、近年の日本への謝罪要求や日英両政府に対する認証及び日本側の認罪・認責への要請の原動力の一つとなっている。かといって、認証を要請しない場合が必ずしも相互理解と和解を意味する訳ではない。日本民族は謝罪する能力が不足あるいは発育不足だから仕方ない」と解釈する例や、一方的に「許し難いが、許してやる」という上下の関係での「許し」に帰着するケースがあるためだ。さらには「全く異なる文化の全く違う人種だから仕方ない」という諦念や、「当時の日本人は軍部の指導で狂気に走ったが、現在は全く異なる人々になった(成長した)」という整理の仕方が数多くみられ、筆者に隔靴掻痒の感を残した。

四、捕虜が体感した日本食

牛蒡・木の根問題の場合、牛蒡を食べる習慣を持たない捕虜が、牛蒡を食材と認識しなかったことだけでなく、その食材の固さに参った可能性にも注意を向けねばなるまい。また、牛蒡の食物繊維や栄養素の消化吸収が可能だったかを確認する必要があるだろう。ここではデータ分析ではなく、捕虜全体に共通した米食に焦点をあて、捕虜が米食をどう感じたかを当時書かれた詩を通して考察したい。筆者との二回目の面談においてデイヴィッド・ウイルソンが理解の一助にと朗読してくれたものである。(以下拙訳)

「米」(スコットランド人中尉作。香港シャンシュイポー収容所にて死亡)

西のほうじゃすごい勝利らしいぜ
もうすぐ解放かな　故郷の愛しい人はどうしてるだろう
はしゃいで信じがたいような噂を飲み込む俺達
ついつい規律も乱れるってもんだ
でもそんな幻想もあっというまに粉々だ
誰かがあの恐ろしい言葉をいうとね――米だぜ！

おれたちゃバケツやら桶やらの山の中からこっそり頂戴する
情けない事に　ネジ一本だって奪い合い
将校さんたちゃニップスの奴等と必死に談判してなさるがね
無駄なことさ、奴等は見下げるばかりさね
どんなに必死の勝負に出たところで

負けたあげくの実りは――米だぜ！

毎日必死で鉄条網越しに食べ物をかきいれる
もの売りのおばさんから何とか手に入れようと
連隊みんな必死の呈
準将閣下におかれましても　リージェントパークの熊よろしく
檻越しにパンを必死で摑もうとして、まったく
珍しい見物だが
大食漢だなんてここでは悪徳じゃあないのさ
何せ俺達の知ってる他の食い物と来たら――米だぜ！

大佐どのも、少佐どのも、下仕官もみんな
動物園でお目にかかるのとは逆のことをやってるのさ＊
あの電撃作戦の以前には、リッツホテルで優雅に軽食
なんていう思い出に生きてござる
しかしここじゃあ、マナーがよろしかろうが悪かろうが
ま、出されるのは絶対賭けてもいいが――米だぜ！

毛布もなし衣料もなし床にころがり寝る俺達に
閉めるドアとて窓とて無い
ある者にとっちゃ何といっても一大事は
衛生状態を保つこと
だがシラミがおそろしいったって　たいした事ないぜ
あのくそ野郎どもが俺等にくれるものにくらべちゃあね――米だぜ！

［＊筆者注：動物園では動物が人から餌をもらうが、今は人が動物（日本人）から餌をもらっている］

作者の中尉は、連隊の捕虜の面々が恥も外聞も捨てて収容所外の物売りから食物を買い取ろうとする様や、収容所の中で噂が広まる様子、悪い住環境を活写し、自分たちの人種観や階級意識も揶揄を込めて描いているが、シラミの害よりも気落ちさせるもの、それは彼らに与えられた食料、米であった。では、彼らはどのような食物を必要としていただろうか。やはり捕虜によって戦時中書かれた、もう一つの詩を見てみよう。

「捕虜の祈り」
香港ボーエンロード病院の捕虜の作。一九四四年二月一日書かれる。米と菊菜の食事の後に

神様、よっく御存知ですよね　シャンシュイポーで生き延びるのは
どんなに大変な努力がいるかを
それとアーガイル通りには　米と菜っぱの他には

［シャンシュイポー（深水埗）：香港の軍人が入れられた収容所。アーガイル通りには、将校クラス用の収容所があった。民間人はスタンレイ（赤州）に収容されていた］[14]

まともな食べ物も無いことを
食事時になっても心は浮き立ちません
ああまた　菊菜の茹でたやつなんです
それからどうやったって　飯の中の
白い蛆はありがたいとはいえません
ちっぽけな黒いコクゾウムシも御免です
小石とかいろいろ酷いのが入っていて
神様わかってます、文句を言っちゃいけないって
でも傲慢な奴だなんて思わないで下さいまし
本当に感謝してかみしめてるんです
今生きているだけでも運がいいって
でもね神様　たとえ貴方様でも
大根シチューにゃすぐ飽きますよ
それでつまり実は何が言いたいかってえと
つまり、シャンシュイポーとアーガイル通りから
まだまだ出ていけないならば
少しばかり肉をいただけませんでしょうか
味のいい、香りたかい、皿に山盛りの肉を
それから神様どうかよろしく
頼みをきいて下さって
赤十字の小包が直ぐに届きますように

戦争末期の食料の不足、米の質の悪さと、野菜も菊菜や大根に限られていること、赤十字の小包が届いていないこと、捕虜が切に肉を求めていたことが分かる。「味のいい、香り高い、皿に山盛りの肉」こそが、捕虜たち英国人が切望するものであり、肉（動物性蛋白と脂肪）は食事に不可欠なものであった。英国の肉の消費量は他のヨーロッパの中でも高い位置を占める。俗語にも'beef up'（元気をつける・重要性を増し加える）、'put beef into it'（力をこめる、仕事をきちんとする）などの表現がある。'beef'そのものに、筋肉や力という意味が生まれた背景には、牛肉と筋力が種々のレベルで相関していたことを示す。日本では餅や米を食べると力が付くという信念が「力餅」や「赤飯」を習慣にしたように、英国人も、牛肉は精神的な満足感をももたらす食物だったといえる。

階層と時代にもよるが、動物性蛋白質からの栄養・ヴィタミン摂取が英国人の食料供給の大事な部分を占め、生存に欠かせない要素であった。動物性脂肪は旧約聖書でもエネルギーや国力、戦力の象徴である（「あなたたちは脂肪を食べて元気づくだろう」「ヤコブの栄光は衰えその肉の脂肪はやせ細る」など）。鯖田豊之は「肉食の思想」において、西洋文化において米にあたる主食はパンではなく、肉と考えた方がよいと指摘している。[15] 捕虜の日記にも、「肉、玉子、ベーコン、ソーセージ、チーズが食べたい」という記述や、夢で肉を食べたなどの記述がそこかしこに見受けられる。いわゆるイングリッシュブレックファストは卵とベーコンにソーセージ、豆とトマトであるが、上記の詩からは捕虜が動物性蛋白を必要としていたこと、質の悪い米や野菜からは必要な栄養摂取が困難であった様子が伺える。一方、極東軍事裁判に提出された捕虜の食事表の内容では米・雑穀と野菜が多く動物性蛋白は僅少ないし皆無である。アボット大佐は、日本側にミルク等西洋の食物を要請したが、聞き入れてもらえなかったことを記している。

米が苦手なだけではない。魚もまた問題であった。リンダ・Kの父親は（既に死亡。戦後日本女性と結婚、その娘にあたるリンダより聴き取り）香港陥落の際に捕虜となり、名古屋の収容所に移送された。そこでは周囲の捕虜が、魚の頭が気味悪くて食べられず手をつけないのを、「今は少しでも栄養を取るように」と懸命に薦めたという。彼自身は、香港生活が長かったため、魚を食べることに慣れていた。

ピオールやノーマン・クリスは、精米であったためにかえって困難が増したと指摘する。玄米には含まれるヴィタミン類が精米では欠落する。胚芽米であれば補えたであろうヴィタミンが、精白米あるいは精米の屑米だったために、かえって不足が進んだという。香港から日本に送られ各収容所を転々としたフランク・ベネットはその状況を振りかえり、彼らのグループは、「割り当てが玄米の屑米であり精米していなかったために、かえって日本人よりヴィタミンが摂取できた」という。

聴き取りで語られる食事内容は、「米とほんの少しの野菜とちっぽけな塩からい魚と、薄い汁」というものが多かった（干物が無い場合もある）。泰緬鉄道の捕虜であり、マレーシアの華僑の宗教に詳しくBCFGのメンバーとして来日経験もあるアラン・エリオットは、「今考えると、あれは典型的な日本の朝餉であった」と述べた。しかし、このような理解は僅少であり、どちらかというと、日本強制労働収容所生存者協会の会長を勤めるアーサー・ティザリントン（台湾金瓜石収容所）が慨嘆するような「朝はマグカップ一杯の米のみの食事で過酷な労働を強いられた」という表現が多い。

質だけでなく量もまた問題であった。スマトラの収容所にいたラム少佐が当時の日記に次のように一人当たりの割り当てを記している。「一人当たり一日の割り当ては全員が、コメが14オンス、乾いた塩魚1、8オンス、根菜（タピオカとサツマイモ）6オンス、料理油1オンス、大豆類4オンス、砂糖7オンス、塩3オンス、果物バナナ6オンス、ココナツ5オンス」[16] 換算すると、米約三九七グラム、干し魚約五一グラム、根菜類約一七〇グラムなどとなる。比較のために、食料の点では概して恵まれていたとさ

れるドイツに捕縛された英国人捕虜の記述を見よう（独伊軍に収容された英国人捕虜の死亡率は五・一％）[17]。

「食料について…赤十字の小包一つが一人あて一週間に一回。加えてドイツ軍からの本当に少しだけの割り当て食料では全く不足で、最初のうち私達は空腹のあまり、パン切り機からパンくずまで集めて食べたくらいだ。（今空腹感が少ないのは）胃が縮んだに違いない。」…「三月。一つ五・五キロもする重い赤十字の小包を一人一人が運ばないといけない。

赤十字物資が届いてからは、ドイツ側の配布と赤十字物資で、量は十分だと彼は述べる。労働の重圧は記されるが、食に関して苦情の対象は量であって食材の内容についてではないことは注目に値する。[18]

五、食材の感覚の差異

食材の相違や食事の量の差異は、それを巡る当事者の感情にも影響を与える。日本人側に捕虜の需要に対する理解が果たして十分存在しただろうか。ティエルニー大貫が分析するように、米、特に精白した白米は、第二次世界大戦中、軍によって「日本人の文化的自己の純粋さ、清浄さを表すシンボル」となり重要な存在であった。米は日本国の国民としての自己認識を植えつけ、愛国主義を高揚する目的に使われた。[19] 内地の白米は、戦地の兵士にまず送られて、兵士は白米から得るエネルギーで戦争に勝つという話が喧伝されたし、戦争に勝てば、まずい外米ではなく、白い内地米が腹一杯食えるという訳で、勝利とナショナリズムは米で表象された。米の日本における当時の位置付けを考察する一助に、やはり詩をとりあげてみたい。以下は、餓島の名で知られるガダルカナルにおいて第二師団の食糧供給の任務についていた吉田曹長の詩である。[20]

「粥」

ここにして、これあり。
これぞこの米の粥。
はるばると数千里、
とよあし原みずほの国のみたからが
ひと年を汗にまみれて
磨き上げたる真珠、宝石。
わだつ海の逆まく潮をのりきりて、
いのちに代えて、海軍さんの
護り来し神のたまもの。
敵機の下をころびつつ、
雨なす弾丸の中這いつ、
汲みたる水を飯盒に入れ
爆撃ごとに火を消して
去りては又焚きつけ、
つとめて煙出さぬ如く、
ねじり鉢巻きして炊きあげたる
この味に二つなし。
いささか塩っぱいは
海水にとぎしためぞも。
（わが涙まじりしならじ）

いざ喰らえ
わが戦友（とも）よ。
喰らわで死にしわが戦友よ。
これぞこの米の粥ぞ。

「米」

一月を食わずにありて
一月め米は届きぬ。
ゴム製の袋に入りて
見なれざる梱包なりき。

その量の多寡、など問わん。
有り難し、銀の粒粒。
手にとらば陽に輝きて、
いと白し、日の本の米、
しかも尚そは米のみか、
セロハンに味噌をつつみて、
又煙草、マッチをそえぬ。
栄養食、とりどりありぬ。

われらかく食わずにありと
心こめて送り来たりし、
おろがみて押し頂けば、
はらはらと涙こぼれぬ。
されどせめて一日早く
なぜなれば届かざりしぞ。
一握の米をつかみて、
つつしみて墓前に供う。

次回は、これらの感覚の差異とずれが捕虜取扱にいかに反映したかを検討したい。

（本文中の敬称は省略しました。）
（なかお・ともよ／岡山大学文学部行動科学科助教授・エセックス大学博士課程）

（1）このセッションはロンドン大学SOAS（School of Oriental and African Studies）のIFCOS（International Foundation Courses for Overseas Students）のSusan Yates学科長、Senior TutorのMichael Coxall及びGeorgio Shani講師を始め、英国在住の日本人・学生・研究員の理解と協力により可能になった。ここに記して感謝したい。

（2）Burma Campaign Fellowship Groupビルマ戦線で戦った英日軍人が和解と理解を進展させる為に結成した団体。英国人一〇〇名、日本人八名。会長ジョン・ナネリー、日本人顧問平久保正男。

（3）一九九四年から九五年のVJデイ・対日戦勝五〇周年記念祭及び帝国戦争博物館の『極東の勝利展』展示に関しては、筆者による映像資料と解説を編集した、朝日ニュースター　フリーゾーン2000『英国50年目の夏』（一九九五年九月放映）を参照。

（4）『朝日新聞』一九九六年（平成八年）一一月一〇日　日曜版「地球食材の旅・ゴボウ」。

（5）「俘虜取扱関係連合側質問に対する応答要領等に関する件達」。内海愛子「日本の捕虜政策　戦時下の外国人の人権」本誌第3号（一九九四年春季号）一五～一六頁による。

（6）小菅信子「捕虜問題の基礎的検討――連合軍捕虜の死亡率と虐待の背景――」本誌第3号（九四年春季号）一八～二五頁。

（7）F.Siordet, "Inter Arma Caritas. The Work of the International Committee of the Red Cross during the second World War. (International Committee of the Red Cross. Geneva 1947.) 引用はSecond Edition (1979) 九六～九七頁より。

（8）極東国際軍事裁判弁護側書証三一四一号。

（9）田中利幸『知られざる戦争犯罪』大月書店、一九九三年。

（10）前掲小菅、二三頁。

（11）レオ・ローリングス『イラスト　クワイ河捕虜収容所』永瀬隆訳、教養文庫、社会思想社、一九八四年　原著　Leo Rawlings, *And The Dawn Came Up Like Thunder*, 1972.

（12）Imperial War Museum, Department of Documents. Hamilton 2nd Lieutenant S OBE (89/15/1), Innes-Kerr Lieutenant G C (87/34/1), Abbott Lieutenant S OBE (89/15/1) 他参照。

（13）捕虜間の窃盗と自己中心さに関しては、現在の聴き取りの中では仲間の悪口になる気がねや、捕虜間の団結の必要、英雄談の言説化の故もあってごく稀にしか現れないが、日記や個人的な回想、小説では繰り返し現れる。

（14）この詩は、色鉛筆で描いた数々の食物のイラストレーションと共に日記に記され、一九九五年帝国戦争博物館で行われた「極東の勝利展」でも展示された。なお香港においてスタンレイの方の食糧事情はましであった。食糧と収容所の地域や個別差の研究と、食と病気の関連性の検討は今後も必要であろう。

（15）鯖田豊之『肉食の思想　ヨーロッパ精神の再発見』中公新書92、一九六六年。

（16）Imperial War Museum, Department of Documents, Lam Squadron Leader（TR 88/62/1）. 菊地有利子（岡山大学文学部歴史学科学生）が聴き取りをした記録によると、南洋メレヨン島で終戦を迎えた彼女の祖父（歩兵第二二連隊）への補給量は一九四四年九月において一日米三五〇グラム、一時は米一〇〇グラムであった。

（17）前掲小菅、二〇頁。

（18）Imperial War Museum 83/41/1, 83/1/1, 83/14/1 等参照。

（19）ティエルニー大貫恵美子『コメの人類学』（Rice as Self）岩波書店、一九九五年（原著一九九二年）。

（20）吉田嘉七『ガダルカナル戦詩集』創樹社、一九七二年。彦坂諦『餓死の研究　ガダルカナルで兵はいかに死んだか』立風書房、一九九二年を参照。彦坂によればガダルカナルにおいて投入された将兵三万一四〇〇名。うち六六％の二万〇八〇〇名が死亡。死因の多くは栄養失調による飢餓死である。